
ひねくれヒーロー

無花果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひねくれヒーロー

【Nコード】

N3070Z

【作者名】

無花果

【あらすじ】

NARUTO転生ものの皮を被ったナニカ。並行世界のNARUTOへ転生した後、原作世界ヘトリップ。逆恨みに嫉妬、恐怖と自嘲で構成されたヘタレ気味主人公が覚悟を決める話。目的は生存、敵は虚弱体質と・・・ツツコミきれない天然忍者たち

死と共にはじまるものは、生である（前書き）

死と共にはじまるものは、生である

―ホセ・マルティ―

死と共にはじまるものは、生である

地球温暖化が各地で叫ばれる最中、猛暑日が続くとある日――

ある高校に異変が起きた

1人の男子生徒を担架に乗せ、慌ただしく保健室に運び込まれたものの・・・

部活の仲間や教員たちが青ざめた顔で祈る中、手当ての甲斐なく熱中症で死亡した

黄色い太陽が焼き尽くしたような、夏の日だった

まさか、口酸っぱく注意されていた熱中症で死ぬことになるなんて
思いもしなかった

先生、職員会議もんだな・・・

いや、絶対それだけじゃ済まないだろうけどさ

悪いことしちゃったな

死んだっていうのに軽すぎるかもしれないけれど

今は本当にそんなことはどうでもいいんだ

目の前の光景が明らかにおかしい

彼方には、見たことのある額当てにベスト、手裏剣やクナイを使っ
た牽制攻撃、もはや目では追いつけない回避行動

此方には、これまた見たことのある黒マント姿の男たちで、赤い雲
が刺繍されている

マントを靡かせながら次々に人外的な攻撃を繰り出している

これが走馬灯なのだろうかいや絶対違う

巷で噂の・・・トリップとかいう奴だろうか

ここは神様が現れるのがテンプレだろうに、何をしているのか

現実逃避がてらまだ見ぬ神への暴言を考えた隙に、誰かの忍術の余波が俺を襲った

（ああ、霊体じゃなくて生身だったのか・・・）

傷口からとめどなく溢れる血を拭おうとした処で、俺の意識は途絶えた

誰かの声が聞こえる

甲高く、それでいてか細い泣き声

声の主を探そうと目をあげようとして違和感に気づく

瞼がひどく重い

とてもじゃないが自力では開けない

怪我の影響だろうか、包帯でも巻かれているのだろうかと考えているうちに、突如腹部が熱をもった

じんわり、いや、そんな優しいもんじゃない

熱を認識した途端、激しい痛みが俺を襲い、その衝撃で微かに瞼が開いた

ターバンの上に額当てを付けた青年と、まるで汚らわしいとも言わんばかりの目を向ける、白衣の中年たち

いつの間にか泣き声は止んでいたが、こいつらが泣いていたわけではなさそうだ

三日月が掘られた額当て

そんな額当てがあっただろうか
もう長い間ナルトは読んでいないから新キャラだろうか、それともアニメのお約束、オリジナルだろうか

「・・・泣きもしないとは・・・気味の悪い器だ」

「いや全く・・・九尾の人柱力といえども、もう少し赤子らしさが見たかったですな」

九尾？

人柱力？そんな馬鹿な、ナルトはどうしたんだ、四代目はどうした、お前らは何者だ？

どうして器と言って俺を見てるんだ

「封印は無事に施された

しかし適合するかどうかはまだ分らぬ

地下神殿にて隔離せよ」

ターバン男が俺を抱き上げた

いくら忍者といっても、簡単に横抱き出来るほど俺は小さくなかった

俺は転生したのか？

赤ん坊から、一からやり直しなのか？

「畏まりました

もしものために医療忍者を数名傍に付かせます

・・・里長、姉君の、・・・御遺体はどう処理いたしましょうか」

「我が姉と言えど、こ奴は先代人柱力

他里に暴かれぬよう茶毘にふし、地下神殿に無縁仏として処理せよ」

短い返事を残し白衣の男たちは去って行った

麻袋に詰められたナニ力を持って

「・・・恨むなら、好きなだけ恨め

お前から平凡な人生を奪ったこの叔父を、この月隠れの里長を・
・恨んで生きていけ」

男は震えながら俺を抱きしめて、諦めたかのように呟いた

この記憶を最後に、6歳までの間、俺の意識は途切れることとなる

神を信ずることは、感情の問題である（前書き）

神を信ずることは常識や倫理や議論の問題ではなく感情の問題である。

神の存在を立証することは、それを反証することと同じく不可能である

―サマセット・モーム―

神を信ずることは、感情の問題である

今日は6度目の10月10日

この世界に転生した日、俺の誕生日

太陽の当たらぬ地下神殿、そこが俺の唯一の居場所

大いなる化け物を、尾獣を封印している巫子さまとして恐れられ、
敬われ、軟禁されている

供え物を運んでくる周辺住人と面会する以外、何一つすることがない

いつも傍で控える、医療忍者から情報を収集することで暇をつぶす

分っていることは、この世界はNARUTOによく似た別世界だということ

木の葉という里は存在しないということ、そもそも火の国自体が存

在していないこと

この国は火ではなく、日の国、太陽神を奉る小国

そんな太陽神のもと、御国のために働く月隠れの忍び里

ここが、俺の生まれた場所

そして今日、誕生日でありながら悲しいお知らせが発覚した

戦争兵器として扱うべく、大切に、しかし放置気味に育成されていたにも関わらず

俺には忍者の才能がない、との判断が下され一生幽閉されることが決定した

理由は簡単

チャクラコントロールが出来なかったのだ

いや、そもそも文字を習得しただけの段階で、教科書だけでチャクラとかいう意味のわからんものをコントロールさせようというのが間違いなのであって！

俺自身に問題はない！・・・と、断言出来ればいいのだけれども

虚弱体質である俺は、生まれつき忍者に向いていないと言われていた

九尾が入ったまま、地下暮らし

出来ることは読書（宗教関連のみ）だけ

ははっ 泣きてえ

せめてもの救いは、九尾が割と友好的だということだろう

いや、もっと小さい頃は体に乗っ取ろうと、画策してたらしいんですがね

精神世界で殺気を向けられる度に失神、発熱、生死の境を彷徨うと

いう流れが確立し、こりゃいかんと思われたそうです

その発熱の影響が、俺の記憶はここ最近まで飛び飛びです

そして九尾「命に関わるという図式が体に刻みこまれたため、声をかけられただけで気絶する始末

完全にトラウマですありがとうございます

いいよ不貞寝するから

それしか出来ないからな

チャクラコントロール・・・出来たら、もつと俺違ってたのかな

才能 があつたら、ナルトみたいにアカデミー通って、友達作れて、忍者になれたかな

せめて体が丈夫だったら、ロック・リーみたいに体術で頑張れたかな
なんで俺、こんな体に生まれてきたんだろう

才能があれば

もつと丈夫な体なら

・・・そもそも、転生なんて、なければ

こんなことには、ならなかった

妬ましい、とはこの事だろうか

憎い、とはこの事だろうか

なんで俺をこんな風に転生させたんだろう神様は

見たこともない、居るのかもわからない神をただただ信じて

なかば八つ当たりのようにその存在にケチつけて

頭を抱えてしまったりして

「・・・うっう」

抑えきれない嗚咽が零れる

なんでもないので、こうなったことは仕方がないので

布団にくるまり口元を押さえる

泣けば全部すっきりする

いやな気持ちは全部涙が溶かしてくれる

そう信じて、泣き続けた

暗く、黒い涙が落ちてくる

この狭いとも、広いとも言える牢獄に溢れだしている

どうしようもない恨みと妬み、そしてほんのわずかの怒りが溢れている

あの小さな宿主が泣いているのだろう

正気を取り戻して泣いている

「……哀れな仔……」

先代の宿主は、かように脆弱なものだっただろうかと思ひ、

尻尾で涙の洪水を一掬い

鈍い音を立てて、毛どころか身を焦がした

大いなる獣よと、大妖怪よと讃えられた、この私の身を焼き尽くす涙

凝縮された恨み

我以上の恨み

「本当に……哀れな……」

せめて最後まで、天寿を全うするまでは守ろう

それが狂わせてしまったことに対する、せめてもの償いのはずだから

たとえ今日負けても、人生は続くのさ（前書き）

たとえ今日負けても、人生は続くのさ。

―メチージュ―

たとえ今日負けても、人生は続くのさ

18歳の誕生日の朝が来た

相も変わらず軟禁・地下生活

度々吹っ飛ぶ記憶に、自分に何らかの障害が起きていることが理解できた

肉体的なもの以外に精神にも異常があることから、生まれながらの虚弱体質が原因だと断言できない

23

九尾の声・・・ああ、そういえばバルコと呼べと言われたっけ

尾獣・バルコの呼びかけがある度に発熱するのが、異常の原因なのか
生まれつきの虚弱体質か、それともこの地下での軟禁生活か

あるいはこれら全てが原因なのか

バルコの言では、このまま行くと、俺は30歳ぐらいで死ぬ確率が

高いようだ

熱に魘されながら、早死にやだなーとおぼろげに考えていた日が懐かしい

俺はきつと、今日にでも死ぬのだろう

腰元に迫りくる水を眺めながら椅子に座した

昨日初めて知ったことだが、なんとこの世界にも”暁”は存在していたのだ

ここ最近信徒さん来ないし、里上層部も傍付きの医療忍者も慌ただししいので聞いてみたところ

この国、他国と絶賛・戦争状態だそうです

昨日、敵国の雇われ集団”暁”に襲撃されたそうだ

そして本日未明、暁による地下神殿への襲撃が始まった

傍付きの誰かと暁が交戦したらしく、水遁が使用され水責めに近い

ことになっている

原作でも同じように何処かに雇われていた暁だが・・・この世界でも同じらしい

ということは、だ

尾獣狩りも行われている可能性がある

木の葉の里ないけど、マダラとかいるの？と思ったけれど別人が黒幕かも知れん

予想でしか考えられないが、人柱力である俺が狙い・・・なのか

もしそうなら、近いうちに尾獣を抜かれて俺は死ぬ

里の人間は助けてはくれないだろう

我愛羅のように、命をかけてくれるような人は・・・いないから

「九尾の人柱力か」

ついにやってきた雲の外套の男たち・・・って、八人もいる？

おいおい、たった一人の人柱力相手に大人数で囲むとは大人げねえ

俺に戦闘能力があれば原作知識で逃げ切れるんだろうけど・・・

病弱巫子様の噂は他国にも流れてるって言う話はどこに行った

しかし原作通りのメンバーだな・・・いないのはペインと小南の2人か

トビがいるということは原作通りマダラが黒幕かな

「・・・なー旦那、あれマジで人柱力かな？
なんかすげえチビなんだけど、うん」

生” うん” 頂きましたありがとうございます

しかしサソリはヒルコの姿か

ご婦人方の間で美少年と名高い本体を見てみたかったな

「・・・小さすぎるな」

「やっぱり？座ってるからかなーって思ってたんだけどさ、うん
鬼鯨の腰ぐらいしかないよな、うん？」

そんなに身長が気になるんだっいたら立ってやるよ勝手に測れ

「あ、立ちましたよデイダラセンパイー
うわ、ちっちゃ」

「・・・大体140？といったところだな」

「肉食わねえからじゃねーの？
ほら、坊主とか肉食禁止してんだろ？」

「えーっ太陽教にそんな戒律ないっすよー
ボク信徒だから知ってますよ！」

なんだかノリがとてつもなく軽い

原作の凄味はどこへやったんだ

飛段とトビはともかく、角都、目測で身長を当てるな悲しくなる

ギャーギャーと敵地で騒ぎだす男たちを押しつけて、1人前に出てくる

・・・イタチだ

「信徒として非常に心苦しいが・・・巫子殿、抵抗せず御同行いた
だこう」

トビいや、マダラもイタチもうちの信徒？

うちは一族は月隠れに住んでいたのだろうか

この世界における木の葉隠れの里は月隠れの里ってことでもいいのか？

・・・どうでもいいか

両手をあげて降参のポーズ、意味は通じたようだ

水の抵抗により、足取りは格別に重く、牛以下の歩みでイタチに近づいて行く

——宿主、正気か？！ 彼奴等に大人しくついて行くなど、何を考
えているのだ！——

パルコの切羽づまった声が響く

ズキズキとした痛みで顔を顰める

直に発熱して、倒れてしまっただろう

だけど、今は、今だけは倒れちゃだめなんだ

何も出来ない俺が出来る、唯一の意地の張り所なんだから

胃の腑から何かがせり上がってくる

喉を逆流し、口の端から垂れ下がる液体

「……暁の、目的は――」

わずかに目を見張ったイタチを尻目に、問いかけた

真つすぐ天をさし、疑問を浮かべた男たちがその指に注目する

口を開くたびに赤い飛沫が見えた

トビに向かい、問いかける

「――月か？」

――何を、宿主よ、何を知って――

九尾の困惑、迫りくるトビ

ああ、やっぱり原作と同じだったんだ

熱が上がってきたのがわかる、もう立っていられない

目にも止まらぬ速さで俺の顔を覗き込んだその目は、赤く、ぎらつき
いていた

軽く笑ってみたら、有無を言わず気絶させられた

何がどうなったのか

我が精強なる月隠れが、傭兵集団ごときに敗れ去るというのか

眼下に頂垂れる負傷者たちにかかる言葉も見つからず、里長としての責務も忘れて神殿に向かう

あの地下神殿が顕在であれば、他国に散らばる信徒たちを焚きつけて奴らに対抗する事が出来る

早く、早くと焦りすぎたせいか、側近たちは周りから姿を消していた
しかし、早く到着する事が出来たことに安著したのも束の間のこと

信徒用に作られていた、重厚な石造りの入り口が無残にも爆破されていた

神殿関係者のみに教えられる出入り口から地下へと降りる

クナイや手裏剣、爆発や様々な術の痕跡

地下に降りるたび、その傷跡は深く、激しい戦いがあったことを知らされる

水浸しとなった大広間へとたどり着き、柄にもなく叫んだ

仮面の男が子供、いや、小柄な青年を抱き上げている

口から血を流し、青褪めながら気絶しているその青年は、まぎれもなく我が里の人柱力で——俺の唯一の甥であつた

「その子を離せッ！」

仮面の男は振り返ることもなく、人柱力を連れて消えた

また、周囲にいた男たちもそれに習うかのように消えていった

負けた

完璧な敗北だつた

愛は死よりも、死の恐怖よりも強い（前書き）

愛は死よりも、死の恐怖よりも強い。

愛、ただこれによってのみ人生は与えられ、進歩を続けるのだ。

—— ツルゲーネフ ——

愛は死よりも、死の恐怖よりも強い

守ってみせると誓ったのだ

他の誰でもない、自分自身に誓ったのだ

あの仔を守ると誓ったのだ

誓ったというのに、何故我は何もできない？

何故助けてやれない？

拷問を受け、我を抜かれ死を待っただけのあの仔を、どうして助けてやれないのか

トビと呼ばれた仮面の男が、黄泉路へ旅立とうとするあの仔を引きずり上げる

切り刻まれた体、首に絞め跡、幻術を見せられた虚ろな目、毒が混じりあい濁った唾液が滴り落ち、手足は碎かれ爆破された

何の抵抗も出来ないあの仔を助けられない

何が尾獣か、助けることもできない無力な獣が、何が尾獣か

必死に模索する

助ける術を、見つけなければならない

ふと、記憶の隅に追いやった術を思い出す

時空間忍術、まだ我は完全には封印されていない、チャクラの使用は可能だ

出来る、守れる！

藁をも掴むかのように、チャクラを練り上げる

彼奴等に気づかれない前に、早く、逃がさなければ――

「・・・九尾め、時空間忍術を利用したところで――人柱力はもう持たんぞ？」

仮面の下で嘲る声が聞こえる

「――ああ、そうさな

我が抜かれた、ただでさえ弱い体はもう、じきに果てる」

もう、心臓の音も止んだ

トビがまるで汚物を捨てるように投げ捨てた

「ならば大人しく封印されている」

そうそうニンゲン如きの思い通りになつてたまるものか

「抜かれて足りぬのであれば、詰めて満たせばよかるう？」

そう言つて笑つてやれば、目が赤くぎらつきよつた

全く、これだからニンゲンは好かんのだ

最後の術を発動させる

火があの子を包み込み、我が尾を2本入り込ませた

もうこれ以上してやれることはない

あとはただ、成り行きを見守るつぞ——

痛みと苦しみ、恨みと嘆きが合わさって胃の腑を燃やした

そのジクジクとした熱さが、黄泉路への灯火だということを知った

白い柔らかなシーツの冷たさが、体の火照りを冷ましてくれる

なかば炭化していた右腕を動かそうと力を込める

診てくれた医者腕が良かったのか、なんとか動かさせた

「……あのばぐばづま……」

いづがぜつでーなぐ・・・げぼっ」

口内に溜まった血で嘔せ返る

2、3分ほど嘔せ続け、ようやく落ち着いた

何をやっていたんだろうか

意地をはったところで、現状をひっくり返せる力を持たない俺に何が出来たというのか

結局マダラに警戒され拷問を受け、洗い浚い吐いただけじゃないか

そうして死を待つだけの俺に、あの狐は何を考えていたのか

なんで俺なんかを助けた

お前なんか嫌いだったのに、恐がったのに

涙が溢れて止まらない

「おお、起きたか！」

白髪に赤い隈取り、眩しく笑った老人は、伝説の三忍・自来也

手に水の入った桶に真新しいタオル、どうやら助けてくれたのは彼らしい

礼を言うことも忘れ、溢れる涙をぬぐうことも忘れ、ただ呆然と口を開いただけだった

愛する者に欺かれている方が、幸福である。（前書き）

愛する者に欺かれている方が、時として真実を知らされるより幸福である。

——ラ・ロシュフーコー——

愛する者に欺かれている方が、幸福である。

「両足と切り傷は大体治せたが・・・手のほうは時間をかけて治療することになった

・・・とにかく、目覚めてよかったわい」

かろうじて動かせた右腕を見てそう言った

顔周りに飛び散った血を、タオルで拭い取ってくれる

何から話せばいいのか、何がどうなっているのか

混乱しすぎて分らない

「お前さんは―そうじゃな、5日ほど昏睡状態でな

わしの知り合いの医療忍者に治療されてようやく落ち着いたんだ」

知り合いの、医療忍者？ツナデか？

「あとは、お前さんが何者なのかというのを知っておる

・・・のう、並行世界の人柱力よ」

「はぁ！？

ちよ、げぼつぐえつ・・・並行世界だと！？」

好々爺とした表情が一転、剣呑としたものに切り替わる

どういうことだ？何故俺が人柱力だということを知られている？

しかも並行世界？なんなんだ、ここはどこだ？

「お、おじえでくれ！

「ここはづき、月隠れの里、もじぐはその周辺だろうっ」

喉を痛めているからかろくな発音にならない

またもや血が飛び散り、それを拭ってもらっ

「落ち着けい、体に障る

・・・ここは湯隠れの里にある湯治施設だ

御主がいう月隠れの里とやらは存在せん」

なんで湯隠れ・・・ああ、覗きか変態仙人

布団の傍にあつた水を飲ませてもらう

血が混じった嫌な味がしたが、幾分か喉の痛みが和らいだ

「・・・なんで、あんだはそれを知っている？」

「五日ほど前、わしが山道にて倒れた御主を見つけた

パルコと名乗った九尾が、わしに全てを教えた」

パルコさん、貴方何をしてらっしゃいますか

自来也はまっすぐ俺を見て、5日前の出来事を語りだした

「わしは自来也といつての、物書きとして取材旅行をしておった

ここ湯隠れの里は良い観光地で、若いおなげふん・・・インスピレーションを湧きたてる場所だ

しばらく通い続けた湯治場から、隠れた名店たるこの施設のことを聞いてのう

新たなネタを、と思い山道を勇み歩いておった

そしてわしは見た、鮮やかな金色の光が空間を引き裂いた瞬間を

金色の光が、炎で出来た卵を庇うかのように包み込んでおった

空間の裂目からは黒い禍々しい炎が、光を追いつめるかのように溢れ出た

裂目自体は直に消え去ったのだが、残りの黒炎は光に一太刀浴びせてから消えよった

そのうちに光は狐の姿をとり、わしに気づいて交渉を持ちかけた

もはや息絶える寸前の者の願いを切り捨てるほど、冷酷ではないんで

わしはパルコの願いを聞き入れ、引き換えに知識を渡された」

喉が渴いたからか、それとも、次の言葉に悩んだためかここで自来也は言葉をつぐんだ

「・・・知識？」

「うむ・・・

日の国、太陽教、地下神殿、そして・・・暁のことだ

お前さんが人柱力で虚弱体質だということも教えられた」

「・・・炎の、卵っで？」

「お前さんにはパルコの2本の尾が入っておる

そのうちの一本が防衛機能として作りだしたのが炎・・・そうじやの、狐火、とでも言おうかの」

もう一つは生命維持に使われておる

遠い目をしながら説明される

思わず右手で腹を撫でた

・・・命が助かったことよりも、それに対する謝罪よりも先に思い浮かんだのは疑問

何故、と声に出さず呟く

答えは返ってこない

「・・・パルコはの、こうも言うておった

あまりにも不憫だったのだと、思わず憐れんでしまったのだと、な」

思考が停止した

憐れみ？

ああ、そうだな、いつだってあいつは俺をひ弱だの、未熟だの、可哀想だのとのたまいやがる

そうか、不憫か

不憫な境遇になったのはてめえの存在だと知ってて抜かしたか

自来也の目が、ひどく冷めたように見えて、哀れんでいるようだった

「・・・見返したいか？」

自来也の手が俺の目を覆った

じんわりとした暖かさが体に染み渡る

何だろうこれは、どこかで感じたことがあるのだけれど分らない

「今までチャクラが扱えなかったそうなの

しかし、パルコのチャクラがお前に力を与えた

これからわしが修行を見てやる、パルコの巫子よ、忍者になれ」

思わず涙があふれた

大声で泣きわめくことはなかったが、それから小一時間は泣き続けていたと思う

泣き疲れて眠るころに俺はぼんやりと誓った

パルコの守りが、狐火が必要ないぐらい強く生きよう

チャクラが使えなくても、忍者になれると、証明して見返してやろう

眠りに落ちた時、金色のお日様が笑った気がした

竜胆よ貴方に届け（前書き）

竜胆の花言葉

淋しい愛情、

悲しみにくれているあなたを愛する、

貞淑、勝利、的確、正義感

竜胆よ貴方に届け

本当にこれで良かったのか

いくら約束と言えど恨みを糧とする生き方をさせて良いものか

「難儀だのう・・・」

泣き疲れて眠った子供、いや違った、青年を見る

赤く腫れた目蓋が痛々しい

ふと、腹部を見る

弟子である四代目火影が使った封印術と似通った術式

並行世界の九尾・パルコが言ったように、この世界とあちらの術は類似しているようだ

「・・・必要ならば嘘もつくが、本当にこれで良かったのかのう・・・」

・
」

瞼を閉じればすぐ思い出せる

決して忘れてはならない記憶、語れることは許されない記憶

——これは取引だ、仙人よ——

——取引、だと？わしにそんなものする必要はないんだがのう——

——僅かながら宿主の記憶は我と同調している
ゆえに、御主の最期と木の葉の行く末も理解しておる——

息も絶え絶えに笑った九尾

何故そこまで人柱力の助けを求めたのか

——なあに、毎回声をかけただけで死にかけられると同情もするさ
・・・それに、償わねばならぬからな——

炎の卵が解れていく

中にいたのは満身創痍の子供

——何も出来ないと思いつめ、追いこんでしまったのは我が原因
なればこそ、我が守るべき・・・

しかし、今となつてはもう守ることも出来ぬ

・・・せめて、戦う術を、叶うならこの仔の夢であつた忍びに
してやってくれ——

子供を見るその目に嘘はない

だが・・・

——・・・九尾、いや、パルコと言つたな

お前にとってこの子はどのような存在だ？——

目を見開いて空を仰ぎ見る

困つたような、照れたような動きが尾獣とは思えない仕草だつた

——どのような存在と言われても・・・はじめは、恨みと哀れみだ
けで・・・

しかし、名を貰つてからは・・・成長を、見守りたいと思つたの
だ——

これが、尾獣か？

いや、違う

こやつは、親だ紛れもないただの親だ

——・・・貴様の弟子の子を、この世界の人柱力を守りたくば” 暁”を探れ

里を守りたくば、蛇の動向を探ると良い
詳しいことは、宿主から聞け——

もう長くは持たないと溢し、子供を託される

なんと子供の軽いこと、気絶しているはずなのに重みが感じられない

——あい分かった！

この三忍・自来也、御主の命がけの嘆願を聞き届け、必ずや立派な忍びにしてみせよう！——

胸をはって答える

親から子を預かるのだ、自信がなければ心配するだろう

——頼む

・・・そして、どうか宿主には伝えんてくれ

九尾パルコは、ただ憐れただけだと、そう伝えてくれ
宿主が正気を保てるのは、誰かを妬み、恨んでいるときだけな
のだ――

・・・一体全体何だというのか、こやつらの関係が理解できん

――それと大切なことを忘れていた

宿主は今年で18歳、分別のつく年頃だ――

まさに衝撃とっていい位、すさまじい発言だった

こんなに小さいのか！？

そう叫べばもうパルコは光の粒子となって消えていた

「・・・しかし、パラレルワールドの狐だからパルコとは・・・
案外安直な奴だの、お前さん」

運命は我らを幸福にも不幸にもしない（前書き）

運命は我らを幸福にも不幸にもしない。

ただその種子を我らに提供するだけである。

——モンテーニュ——

運命は我らを幸福にも不幸にもしない

ここは湯隠れの里

観光地として有名な湯治施設を多く保有する、忍びの隠れ里とは思えない平和な里だ

月隠れからこちらへ逃れて4ヶ月

地元住民と交流を持つに至ったこの俺だが、残念な子と評されている
それはなぜか

「おいこらエロジジイ！
テメエ俺を囷にして逃げるんじゃないぞ！」

三日と開けずに騒動を起こす人物の連れだからだ

俺は簀巻きにされ、エロジジイこと自来也に覗き場へ引きずられて
いる

取材と称して覗きを行うジジイの悪癖に付き合わされるたびに、こ
れも修行と言われて俺が囷にされるのだ

覗きがバレて女性客に追われることもある、俺が施設の人に怒られることもある

理不尽だ

「この自来也さまに向かってエロジジイとは何事か！
そんなだからお前は大きくなれんだ」

呆れたように溜息をつかれる

こっちのほうで呆れているというのに、このジジイ反省の色もない

「関係ねーだろが！・・・げほっ
あ、あのねーちゃん良い尻」

覗き場に到着すると、微かに見える女体を観察する

胸も良いものだが、尻も良いよね

「何！？」

途端目を輝かせ鼻息荒く覗き始める

本当に何故こんな男が伝説とまで呼ばれるのだろうか

立派に育った弟子、四代目火影に申し訳なく思わないのか

あと弥彦と長門と小南に謝れ

三代目火影は割とエロかったのできつと同類なんだろう、多分

メモをとりながらヒートアップしていく自来也を尻目に、深く溜息
をついて・・・咳きこんだ

良かった吐血しなかった

場所を移して人里近い野原に向かい合う俺たち

「よしよし、本日の取材はこれまで！
それでは修行の時間といくかの」

にんまりと笑われたのがムカついて脛を蹴ろうとするが、案の定軽く避けられた

「そんな見え見えの蹴りじゃあたらんぞ?」

頭に手をのせられる

18歳だと知っているのにこの行動、おちよくっている、こいつはおちよくってやがる

「・・・さつさと修行つけろよ」

手を払いのけてやる

そうするとカッカッと笑って座りこまれた

「うむ、それではいつも通り瞑想からだ、座れ」

以前チャクラコントロールの才がないと言われていたが、自来也の修行を受け始めてから少し変化が見られるようになった

そもそも、チャクラとは肉体エネルギーと精神エネルギーを練り上げたものだと言われている

人間に生まれつき備わっている力がコントロール出来ないわけがない、そう自來也は断言した

神殿時代、教科書見せられて後は放置という状況に問題があるのだとも言った

チャクラはあるのだからどう練り上げるのか、どう扱うのかを教えないければ使えるわけがない

慰められるかのように語られた

・・・確かにそうだな、いきなり教科書見せて試合やれとか言われたことないわ

ぶつつけ本番にもほどがある

「コン、集中が乱れとるぞ?」

自来也に指摘されて思考の渦から引き戻される

再び瞑想に集中する

俺の腹部に熱が籠もる、自来也が唸った

また失敗か、溜息をついて立ちあがり、目をあけると炎に包まれていた

「うーむ、やはりパルコのチャクラしか引き出せんか」

首をかしげて悩まれる

・・・自来也に修行をつけてもらって早三ヶ月、未だに俺自身のチャクラを練り上げたことがない

瞑想すると必ず九尾の、パルコのチャクラの残照たる狐火が俺を覆うのだ

俺自身のチャクラは練れないが、この狐火を扱うことは可能になった

覆わせることしか、出来ない防御用だけだな

これはきつと我愛羅の砂と同じなんだろうか

「とりあえず狐火纏ったままりハビリ運動せい」

不燃布で作られたクッションを手渡され、関節運動を始める

切り傷とか爆破痕は治ってるんだが、サソリに飲まされた毒の影響が残っていて体が動かしづらい

寝ころんで関節を曲げたり伸ばしたりしていると、そそくさと木桶と水差し、タオルに着替えまで用意される

ふっ過保護師匠め、慣れてきたリハビリ運動で吐血なんぞ、もうしない！

せっせと用意された看護用品を横目に勝ち誇った笑みを浮かべた

その15分後、血塗れになった上着を洗う姿が住民に目撃された

湯隠れの里内部、決して未成年は入り込めない風俗店が立ち並ぶ裏路地

2人の男が居た

「・・・なー角都よオ」

1人は鎌を持った黒い外套の男

連れであるもう1人の覆面をつけた、同じく黒い外套を身に付けた男、角都に話しかける

「・・・黙って歩け」

「俺ら、尾獣狩りしてんだよなア？」

立ち止まる角都、訝しげに連れを見る

「どうした？とうとう頭がイカれたか？」

冗談拔きの低い声、医者によるか？と声をかけた

「・・・なんか癪に障るけどよオ、今は良いや
俺ら、九尾の人柱力って、捕まえた・・・よな？」

「・・・飛段、お前死に過ぎて頭が・・・」

冷や汗をかいて飛段を哀れむ

それに激怒するはずの飛段から何の反応も返ってこないことがまた
不審がらせる

「いや、捕まえたって・・・あれ？でもまだ尾獣狩りの説明された
だけ？」

まだ人柱力の居場所探しの途中で・・・あれ？」

頭を抱え始めた飛段

自分でも何が何だかわからないと騒ぐ

「あーッわかんねえ！！」

そうだとビに聞きやいかってトビって誰だ？

・・・うーん・・・鬼鮫あたりならわかんذار、な、角都ウ！」

納得したらしく、立ち止まったままの角都を置いて足早に歩き出す

「・・・・・・・・」

溜息をついて仕方なく歩きだす角都

騒がしい相方に疲れが出てきたようだ

「・・・・・・・・結局何だったんだ・・・・・・・・」

聊か肩を落とし年相応の哀愁を漂わせる

寂しげに風が外套を揺らした

考えるな、感じる（前書き）

考えるな、感じる

―燃えよ、ドラゴン―

考えるな、感じる

広い野原、そよぐ風

自来也が真剣に見守る中、チャクラを練り上げ印を結ぶ

ゴクリ、自来也から大きく聞こえるほどの静けさ

大丈夫、俺なら出来る、そう何度も繰り返して臨む

「分身の術！」

薄い煙が立ちあがり、もう一人の俺が出現する——成功だ！

「やった、成功だ——っ！」

半年、半年かけて成功した分身の術！」

何故だか俺の分身は血を吐いていたがそんなの気にしない、俺も今吐血している

ようやくまともに出来た忍術、たかが初級忍術と侮ることなかれ

俺の努力が実ったんだ

分身体を消して自来也のほうへ振り返ると、泣いていた

・・・やだこわい

「・・・チャクラを練り上げるたびに、穴という穴から血を噴出しとったお前さんが・・・」

ようやく・・・ようやく・・・」

自来也は目元を手で蔽い隠し男泣き

目元の隈取りが落ちかかっている

そんなに泣かなくても良いと思うんだがなあ

「そんなこともあったね」

思わず遠い目で空を仰ぐ

自分自身のチャクラだけでは血を噴出してしまい、印すら組めなかったがパルコのチャクラと合わせることにより忍術の使用が実現したりハビリも大体終わり、狐火のコントロールを覚え、次の段階へと移行した修行の初日

1週間意識不明の重体に陥ったのがもはや懐かしい思い出だ

「本当に良くやった！

・・・それでは、約束通り・・・褒美を渡そうかのお」

涙を乱暴に拭き取り、懐から何かの書類を取り出す

その中から1枚、それとペンを俺に渡す

えーと、何々？木の葉アカデミー編入者の氏名を記入・・・ああ名前を書くのねって

「アカデミー！？しかも木の葉！？」

「分身の術はアカデミーレベルでは上級忍術に位置する
半分だけが自分のチャクラも練れるようになった今のお前なら、
入学いや編入させて大丈夫だと思ってな」

「俺が・・・アカデミーに・・・でも、俺勉強あんまりしてない・・・」

不安で胸が締め付けられる

そんな心配性な俺に自来也は笑い飛ばして見せる

「今までの修行で基礎は教え込んであるし、ワシの小説の誤字訂正
まで出来るんだしの

アカデミー位なら大丈夫！」

頭を撫でられる

久しぶりの感覚に微かに顔が赤くなるのを感じた

懐かしい、前世の親にはこんな風にされたことなかった

思わず涙があふれ出す

「・・・自来也、その、いつもエロジジイだの変態だのどうしようもない覗き魔だのと思ってたけど・・・」

涙声になっているのが自分でもよくわかって、段々と声が小さくなってしまう

「・・・お前のお・・・」

少し傷ついたように肩を落とし屈んだジジイ

これだけは言わなくてはと、耳元で呟く

「あのさ・・・先生、ありがとう」

本当に、ありがとう

素直に感謝したのは何年振りだろうか

神殿時代は感謝なんて形式だけだし、パルコなんか論外だった

もしかしたら転生して初めてのありがとうかもしれない

「わはははっ！お前から感謝されるなんて久しぶりだの！
さあさ、早く書類に記入せい」

「わかってるよ！」

鞆から厚めの本を取り出して（イチャパラに非ず）下敷き代わりに

使う

生年月日は10月10日で血液型はB、性別は男

ん？好きなものとかも書くのか、何に使うんだろう

好きなものは・・・うーん雑炊かな、嫌いなのは油っこいもの

前世は中華そばが好きだったんだけどな、今はラーメンとか食べる
と胃が死ねるね

好きな言葉は・・・「考えるな、感じる」・・・燃えよドラゴンだ
ったっけな

鼻歌交じりにさらさらと書きあげて行き、やがて筆が止まる

・・・どう、しょつか

「・・・何故、名前を記入せんのだ？」

訝しげに首を傾げる

そういえば、今まで名乗りすらしなかったな

「うーん、なんていうか名前、ないからねー」

後日、名前がない発言に心底胸が痛んだと語られた

神殿　チ力とかどうだろうか

いや女っぽいな、うーん月野　ミコ、駄目だ女性名だ

そっぴりや里長の名前、最初笑ったわーなんだよ月影^{つきかげ}　乃斗^{ないと}って名前

某美少女戦士のアニメ版にそんなのいたよな月影のナイト様ーって
言われてるやつ

前世の名前は使いたくないしなー、なんか踏ん切りつかないし……

この世界で俺を表現できるのは……神殿？地下？巫子？九尾？

九尾、パルコか

俺がこんな体になった原因、恨んでも、妬んでも足りない奴

・・・うらみ、ねたみ・・・

「自来也、俺のこと今日からコンって呼べ」

さらさらと書きあげ、書類を突き付ける

「・・・コン？」

目をまん丸にして問いかけられた

自信満々に笑って答えてやる

「そ、俺は今日から、ねたみ　コンだ！」

胸を張り、宣言する

そっだ、俺はねたみ　コンになるんだ

人柱力でも、地下神殿の巫子でもない、ただの忍者見習いのコンになるんだ！

名前があるということは胸が温くなる

何処となく腹部も熱を持ち、思わず腹を撫でおろす

「どっから出てきた？」

「嫉妬に怨恨」

笑ったつもりだったけれど、うまく笑えていただろうか

「・・・（狐だからかと思った）」

「・・・（安直すぎるな俺）」

急に静まり返った2人の間に暖かい風が吹き抜けた

何処からか——風に乗って声が聞こえた

——おめでとう、コン——

甲高い狐の一鳴きが、あたかも人間の言葉のように聞こえたのは気のせいだったのかな

希望に満ちて旅行することは、目的地にたどり着くことより良いことである（昔）
希望に満ちて旅行することは、目的地にたどり着くことより良いことである。

―ステイプンソン―

希望に満ちて旅行することは、目的地にたどり着くことより良いことである

木の葉アカデミー編入書類が受理されたことを伝書蝦蟇から伝えられた

自来也は一足先に木の葉へ赴き、移住の手続きをしているらしい

・・・湯隠れに俺を一人置き去りにして、だ

湯隠れからどんなルートを使っても良いから木の葉へ行くこと

それが自来也の修行、最終試験

寝起き吐血で朝の目覚めが血生臭いうえ貧血気味のこの頭に、突如降りかかったこの問題

伝書蝦蟇も酷く同情してくれたうえ、面白いことを聞かせてくれた

18歳だし、一人旅ぐらい大丈夫、そう自分に言い聞かせるものの凄く不安げな自来也がいた、と

・・・18に見えなくてごめんな、自来也・・・

吐血痕を片づけ、身支度を整え、顔なじみになった宿の主人に声をかける

湯隠れから木の葉まで、子供が一人旅で無事にたどり着けるルートを聞き出す

なけなしのプライドが木っ端微塵になったのは内緒だ

かなり主人を悩ませてしまったがなんとかルートを決めることが出来た

火の国の北東に湯隠れはあるが、忍びでない子供が真っ直ぐ木の葉へ向かうのは厳しいそうだ

なので、一旦雷の国へ行き、そこから船で火の国へ向かうことを勧められる

ずいぶんと遠回りになりそうだなと地図を確認しながらばやいていくと・・・

「坊主、大国レベルの医療技術じゃないとぶっ倒れた時がヤバイ」

両肩をつかまれえらく真剣に説得される

・・・そうだな、俺、綱手が置いて行った薬で無事なんだもんな
薬が足りなくなったら蝦蟇経由で薬を貰いに行ってたしな・・・

最後に路銀の確認をし、チェックアウトを済ます（宿代は自来也が
別にとっておいてくれた）

「じゃ、またいつか泊まりにくるよ！飛階のおっちゃん！」

長らく泊まった思い出深い宿

飯も美味かったし絶対また来よう

「吐血したままうつくなよー」

新聞を見ながら声だけ返してくれる

ロマンスグレーの崩したオールバックが途轍もなく渋い

いつか俺もあんなオッサンになりたい、と脳裏に淡い希望を描く

歩みも軽やかに雷の国へ行く商隊を目指す

声をかけて一緒に連れて行ってもらおう

・・・そっいや、飛階のおっちゃんって何処かで見たことあるような気がするんだが・・・

何処で見たんだろう？神殿時代の信者かな？

いくら唸ってみても記憶から導き出すことは出来なかった

悩みながら呆けて歩いていると躓いた

ちょうどデコのあたりに小石があったせいで無駄にダメージがでかいしばらく蹲っていると人影が近づいてきた

「オメエ大丈夫か？うん？」

黒いポニーテールの青年が手を差し出してくる

出された手に大人しく握まり立ちあがる

「デコに小石めり込んで痛かったけどもう大丈夫、心配掛けてすいません」

一礼して距離をとる

純粹に心配してくれただけかもしれんが用心にこしたことはない

「うん・・・お前、凄い血流れてるぞ、口から」

「通常運転であります」

敬礼して答える

面喰ったように瞬いて呆れたように見つめてくる

「・・・お前、本当に大丈夫か？」

何処が？と聞きたいがまあ、大丈夫なものは大丈夫だ

乱暴に口を拭って商隊を追いかけると何故か青年もついて来た

「兄さんも商隊に用があるのか？」

振り返って声をかける

「ん、雷の国までちょっとな

あの商隊を追いかけるってことはお前も雷の国までか？うん？」

後ろにいたはずの青年はいつの間にか真横で歩いていた

・・・コンパスの差ですね妬ましい

頷いて返すと、青年は頷き返したあと大声で商隊に呼びかけた

聞きつけた商隊の人間が現れると、俺から離れ交渉が始まり、あれやこれやの内に馬車へ誘導される

されるがままに馬車に乗り込み腰かけると青年が笑った

「病気の弟を雷の国の病院まで連れて行くんだって言ったらコレだ、うん

得した気分だ」

何やら利用されたが、こういうのも旅の醍醐味かもしれない

「髪の色違うから疑われるんじゃないの？」

「大人は複雑な関係を妄想したがるもんさ・・・うん」

青年の髪は黒、俺の髪は白髪・・・いや、乳白色だこれだけは譲れない

たとえドヤ顔で決められても、この青年と兄弟というのは嫌だ

「そもそも弟っていうのも気に入らない」

なにやら粘土を取り出してこね始めた青年

あまりにも自然に出してくるから吃驚した

粘土くせえ

「うん？だって年下だろ？」

デフォルメされた鳥を作りながら問われる

・・・こいつが何歳であろうとこの発言を許してなるものか・・・

「18歳だ」

「・・・嘘は、駄目だぞ、うん」

額に汗を流し眼をそむけた青年

本当だよ馬鹿

「俺、コン

あんたは？」

いい加減青年青年言うのも飽きたので自己紹介してみる

「うん？オイラは、ダラーってんだ
道中よろしくな、弟」

金にうるさいのだろうかと考え込んだ

弟という言葉に何やら含みを感じた

・・・なんかこいつ、見ためよりまだ若いよな・・・

「・・・なあ、お前何歳？」

問い詰めると粘土を弄る手を止める

冷や汗が出てきている

「・・・」

無言で顔をそむけた

・・・年下だったか・・・

希望に満ちて旅行することは、目的地にたどり着くことより良いことである（後

アニナルで木の葉から雷の国へ行くのに船を使っていたのでこんな
感じに。

・・・ナルトの詳細地図は公式で出ないかな

世間の人が友愛と呼んでいるもの（前書き）

世間の人が友愛と呼んでいるものは、ただの社交、欲望の駆け引き、親切のとりかえっこに過ぎない。

結局自愛が常に何かの得をしようとする一種の取引に過ぎない。

——ラ・ロシュフーコー——

世間の人が友愛と呼んでいるもの

ガタゴトと音を立てて馬車が走る

雷の国、国境近くの街道を進む商隊

いくつかの馬車を囲む護衛の忍びたち

揺れる馬車の出入り口から外を伺うと、何人かの忍びと目があった

何気なしに会釈してみると、彼らも同様に返してくれる

年のころ12、3歳ぐらいだろうか、下忍になりたてらしく、何処か様子が危うげだ

長く続く街道の景色に飽きが来て、なかへ引つ込む

中は商隊の荷物以外にダラーが作り出した粘土細工で埋め尽くされている

丸い蜘蛛を手に取り眺め、徐に潰し捏ね直す

もにももにもに・・・

「まかろーん」

前世でよく女子が好んでいた円形の菓子をモチーフにしてみる

吐血した血を練りこみ赤く染め上げるとまるで苺のマカロンのようだ

食いたくない

「・・・何だそれ」

ダラーの問いかけを無視し、旅のおやつにと思い作ってきたマカロンの袋に粘土を混ぜる

思わず、といった風に手を伸ばしたダラーを制止、出入口口にかけてある布をあげ、近場にいた下忍の少年と少女に声をかける

「あげる、はずれ付きだけどね」

背後から性格悪いぞ、うん等と聞こえてきたがスルーである

2人は顔を見合わせ、少し離れた場所にいる担当上忍らしき男を伺う

男は少々渋ったが、問題ないともいうように頷いた

いただきます、と丁寧にマカロンをとる2人

様子が気になったのかダラーも顔を出したので、彼にも袋を渡す

「ほれ、兄ちゃんも食え」

渋々袋に手を入れマカロンをつかみ取った

「変わったお菓子だけど美味しいわ」

何処の世も女子はこういうものが好きらしい

マカロンアイスのほうが好きなんだけどな

「アーモンド使ったお菓子だよ」

赤は苺で緑は抹茶、茶色はチョコだよと説明する

少年は抹茶をとったが少々苦かったらしく、チョコをあげた

「アーモンド？」

きょんとした顔で呟かれた

あれ、アーモンドプードルは売ってたのに、知らないのか？

「・・・落花生？」

どう説明すればいいのか分からなくなったので、誤魔化す

下忍との和気あいあいとした会話に上忍は微笑ましく眺めている

会話に交じれなかったスリーマンセルの残り1人の少年が少し寂しげだ

甘いものがあると会話が弾んでいいな、と久しぶりの賑やかな会話に和む

・・・そういえばダラーは何マカロンとったっけな・・・

ふと後ろを振り返ると、口元を押さえて蹲るダラーの姿

えづく音が聞こえてくる

「お、兄ちゃんがはずれだ」

「うわー・・・カワイソー・・・」

「なあなあ、はずれって何味？」

半笑いで訪ねてくる少年少女

そんなに笑ってやるなよ

「粘土With俺の血」

とびきりの良い笑顔で親指を立ててやる

「・・・・・・・・」

途端に顔色を青くした2人が後方を指さす

うん、何か威圧感があるね

「なあ、コン

兄ちゃんとお話しようか・・・うん」

力強く肩を掴まれる

2人に助けを求めようと視線を向けるが逸らされる

「仮にも兄ちゃんの粘土なんだから臭いで気づいてもらいたい」

なんで食べたの？とも言うようにふんぞり返って告げる

我ながらム力つくな

「お前の血の匂いで分らなくなったんだ、うんッ!」

食べたことない菓子だからそういうもんだと思ったんだよ!とヒステリックに叫ばれ拳骨を落とされる

袋に入れた時点で血の匂いが充満してしまったのか

いつも自分自身が血生臭いから気にも留めなかった

ひらひらと下忍たちに手を振って馬車のなかへ戻ることにした

「兄弟アピールは出来たんじゃない?」

ダラーに向き直り、マカロンを渡す

「うん?!お前そんなこと考えての行動だったのか?」

素直に受け取って口直しに食べ始めた

吃驚したような関心したような、目が輝いている

「いや、ただの暇つぶしなんだけどな」

「お前嫌いだ！うん！」

残りのマカロンを奪い取られ、やけ食いされる

味は気に入ったらしい

俺のおやつが・・・

落ち込んだが、これでなにかあったときの看護要員を確保できたと思えば安いものだ

周囲に兄弟と触れ込んで馬車に乗ったんだから、弟の面倒ぐらい見てくれよオニイサン？

芽吹いた孔雀草（前書き）

ご機嫌よう 友情 悲しみ 美しい 思い出 飾り気のない人

芽吹いた孔雀草

酷い目にあつた

傍らで粘土をこね続ける自称・18歳から目をそむけ不平を飲み込んだ

確かに、この子供にしてはやけに大人しく、かといって大人だと断言できないアンバランスさは青年と言っていていいだろう

任務でなければ声など掛けなかっただろうに

路傍の石と同じ存在を何故氣にかけてしまったのか

いまさら悔やまれる

そもそもS級犯罪者として名をはせた自分が氣にかけるなど有り得なかった

任務の遂行に必要なと感じたが故の、行動だったのだと自分に言い聞かせる

(・・・七面倒臭い任務押しつけやがって・・・)

変化でなく染め粉で黒くした髪を弄る

脳裏に任務を言い渡したりリーダーの顔が浮かび、無性に腹立たしい

―雷の国に本拠地をおくテロ組織の補給商隊の割り出し及びその壊滅―

組織の末端であるこの商隊を尾行するのではなく、商隊所有の馬車にこつも安々と潜入出来るなど思ってもみなかった

2、3日もしない間に幹部クラスの商隊と合流するとの情報もある
気づかれないように尾行する手間を思えば随分と楽だ

組織の末端も末端、普通の商隊と変わらない

忍びや護衛を雇う金の無い人間は皆、商隊を頼り旅をする

この商隊にもそんな人間たちが大勢着いてきている

馬車に同乗しているのは余程の老人か病人ぐらい

1人だけでは確実に護衛の上忍に怪しまれたらうが、今回は大丈夫らしい

馬車に乗せるよう交渉したときの商人

口から血を流していたコンを見て、随分と気の毒そうにこちらを見ていたあの顔

どこからどう見ても病人といった子供に歩いてついてこいなどとは言えぬ小心者

良い拾いモノをしたと思った

あちらから進んで兄弟として行動するため、幻術をかける手間がない

だからといって粘土菓子の方は許さないが

正直に言って、このままコン諸共すぐに爆破させたい気持ちでいっぱいだ

しかし下準備もなしに無計画の爆破というものは美しくない

己の美意識を優先させ機が熟すのを待っているのだが・・・どうにも調子が狂う

文字通り現在も血反吐を流し続ける少年が原因だと・・・

・・・現在も？

「コン！？お前大丈夫か、うん！？」

粘土が血に染まり、抑えた手の間から血が流れ出している
顔色も悪く、医者を呼ぶべきかと考え粘土を片づけておく

「・・・げえ・・・酔った・・・」

青白い（鬼鮫には負けるけど、うん）顔が血に染まった

しかしコンは意外と平気そうに持っていたタオルで血を拭いだす

「乗り物酔いで吐血すんのかお前は！」

上着が血みどろになっているので剥ぎ取ろうと手にかけてと振り払
われた

（・・・なんかムカついたぞ、うん・・・）

「自分で着替えれるから後ろ向け」

見て気持ち良いものじゃないぞと追い払われる

素直に後ろを向き、衣擦れの音が聞こえ始めた時振り向いた

ただの、仕返しのつもりだった

見られたくないと言った意味を考えもせず、生意気な子供をからかってやるうと思った、ただそれだけだったのだ

青白く細い体に浮かぶ刀傷、縫い痕だらけの背中

腕や首筋に浮かぶ注射痕、拷問でも受けたのか

小さな体に不釣り合いな夥しい傷跡

そのなかでも鮮明に映ったのは、まるで、爆発でも受けたかのような火傷のあと

芸術家としてのオイラが、ただひたすら美しいと感じた

脳裏に浮かんだコンへの忍び疑惑など、捨て去るほどの美しさだった

野盗や獣に襲われることなく、無事に雷の国へとたどり着いた

長い間馬車に揺られていたせいで体のあちこちが軋みだす

粘土マカロン事件より口数が減ったダラーとともに商隊に別れを告げ、広場まで歩きだす

片手で広げた地図を確認すると、この町から一日ほど歩いたところに港町があるようだ

ダラーの目的地は知らないが、ここらで兄弟ごっこは辞めてお別れしよう

「にい・・・ダラー、ここまで面倒見させて悪かったな

俺はここから港町に行くからここでお別れだ」

立ち止まって声をかけるとダラーは身を正し、真っ直ぐこちらを目で射抜いた

「・・・コン、聞きたいことがある・・・うん」

おまえは、忍か？

そう問いかけられ、少しばかり悩む

自来也に修行をつけてもらったとはいえ、忍者登録も、アカデミーにも入学していないこの身

忍びかと聞かれれば否と答えるしかないだろう

首を横に振ることで答えた

「なら！

お前のあの、爆発痕、誰にやられた！？」

血気迫る表情とはこのことが

肩を掴まれ問い詰められる

着替えのときに視線が感じると思っていたけど・・・

ここで素直に暁のデイダラです、と答えると何故暁を知っているのかと大変ややこしい状況を引き起こしそうだ

悩みに悩んだ俺の答え

「爆発に美を見出した芸術家にやられました」

誤魔化したようで誤魔化し切れていない、分かる人なら分かる特徴を告げてしまった

・・・まちがってねーもん

「・・・やっぱり、芸術は爆発なんだな、うん！」

しばらく震えていたダラーは顔を上気させて喜んでいた

なんだろう、この同士発見とでも言いたそうな目は

・・・そっぴやダラーってどっかで見たことがあるような・・・

「その芸術家はどこの誰だ?! オイラぜひ会いたいんだ、うん！」

悩んでいる最中に邪魔される

「あー・・・もう(この世界には)いないんだ、ごめんな」

嘘はついてない

「そんな・・・っ

・・・そいつの最期の作品はコンってことになるのか・・・」

意気消沈してぶつぶつと呟きはじめた

こいつ怖いな

「・・・なあコン、芸術といえば？「爆発です」・・・その通りだ、うん！」

お前は芸術を分かっている！そう肩を叩かれながら叫ばれた

叩かれた拍子に吐血したがごく自然に拭われた

自来也といい、ダラーといい、俺の看護要員はレベルが高いな、うん

おっと、口癖がうつった

・・・うん？口癖？

引っかかる、何かが引っかかる、だが、まさか・・・

「よし、オイラもこうしちゃいられない、誰にも負けないアートを作り出してやるぜ

勿論、コンに負けないぐらいのだ、うん！」

笑いながらポニーテールを結び直し、丁髷にしたダラー

・・・段々と記憶の中にある人物を彷彿とさせるような・・・

「コンだから教えてやるよ、オイラの本名はデイダラだ
覚えておきな、いつか爆発の芸術家として名を上げてやるからな、
うん！」

・・・それからの会話は、良く覚えていない

混乱した頭で旅の無事を祈って別れた

デイダラと商隊が去って行った方角から爆発音が聞こえてきた気も
するが無視だ

港町へ至る街道を歩きながら頭を抱える

「・・・だって金髪じゃなくて黒髪だったから・・・」

誰に聞かせるわけでもない言い訳を繰り返す

デイダラといえば金髪丁髷だろ？と心の中で呟いた

狐火が頬を撫でてくる

何の慰めにもならなかった

「・・・あつ

一発殴るの忘れてた・・・」

子供は空を飛ぶ鳥である（前書き）

子供は空を飛ぶ鳥である。気が向けば飛んでくるし、気に入らなければ飛んでいってしまう。

―ツルゲーネフ―

子供は空を飛ぶ鳥である

港町へと至る長い街道

足取り軽く等と言えぬ状況に陥っている

俺の後方を歩く覆面の男性、もうじきすぐ傍まで近づくだらう

歩幅の差が恨めしい

足音に気づいたときに振り返ったあの瞬間

肝が冷えるどころではなかった

思わず首に手を当てて、今は消えさった絞め跡をなぞる

後ろを歩く男は暁の角都だった

（何なんだよお前S級犯罪者だろうせめてデイドラみたいに少しは変装しろよふざけんな怖い！）

肩に担いだアタッシュケースがより恐怖を際立たせる

あれか賞金首を換金されたんですね？

走り去りたいが一本道の街道で、まだまだ道が続くこの道で逃げ切れるわけがないだろう

せめて飛段がないのが救いだろうか・・・

・・・そういえば湯隠れの里の飛階のおっちゃん、飛段に似てたな・

・・・まさか親族か！？

思わず肩が震え、抑えるように両手で抱き締めた

「そう怯えることはない」

声をかけられた

何故話しかけてきてるんだお前は

沈黙は金なりという偉大な言葉を知らないのか！？

汗をかきながら黙っていると悩みだされた

俺のほうか悩みたい

「ふむ・・・そう怖がられると困るな・・・」

困られても困りますう！

距離を取ろうと早歩きで行くが・・・全く距離は変わらない

何だと言っんだ

「・・・何か御用でしょうか・・・」

「ああ、少し協力して貰いたくてな
駄賃はやるう」

協力？と聞き返す間もなく、俺は首根っこを引っ掴まれ後方に投げ
飛ばされた

衝撃に備えて可能な限り受け身の態勢をとるが、地面ではなく、誰
かにぶつかった

あれ？

「うわっ！・・・くそ、ばれたかつ」

茂みに隠れていたゴロツキらしき男たちは刀を抜き、臨戦態勢には
いった

ちなみに多分リーダーであつただろう男はぶつかった拍子に気絶しており、子分たちが必死に揺り起そうとしている

角都は囲まれても悠然と立っており、ゴロツキなど眼中にないようだ

（・・・俺、投げる必要あつたか？）

意味のわからない行動に目を白黒させているうちに、角都对ゴロツキ集団は勝敗を決し、あたりは血の海になった

噎せ返るような血の匂いに眉を顰める

いくら自分の血に慣れていると言っても、これだけの血は耐えきれない

気絶から回復したリーダーも復帰してすぐに心臓を貫かれて死亡していた

「・・・ふむ、一文にもならん雑魚め」

返り血を浴びて手帳を確認している

恐らく賞金首について書かれた手帳だろう

「ああ、悪かったな
ほら、約束の駄賃だ」

立ちあがって近づいた俺にようやく気付いて何かを渡される

・・・飴玉だった

ひとつふたつどころじゃなく、五袋ぐらいあった

何故こんな大量にと思い、飴の袋を確認すると賞味期限が今日だった
歩き出しながら話しかける

「・・・食べきれないから？」

肩をすくめ、呆れたように答えられた

「仕事の相方が預けていって、そのまま忘れているみたいなんだな」

飛段のおやつを手に入れてしまった

ジャシン様に呪われないだろうか、心配だ

でも投げ飛ばされただけでこんなに貰うのも悪いな・・・

一度も血を拭ったことのない、新しいタオルを角都に差し出す

「返り血、拭ってください」

「・・・ああ、頂こう」

飴袋を取り出してからも外套のなかを漁っていたのを見て感づいた

こいつタオル忘れてやがる

予想は正しく、素直にタオルを受け取って返り血を処理し始めた

横目で眺めていると、潮の匂いが辺りを漂い始める

目を凝らせば海から反射する光が見えた

ここからなら、走って町にすぐ入れる

角都に向き姿勢を正して一礼した

「タオルは捨てていただいて構いません、飴ありがとうございます！
た！」

失礼します！」

言うが早いが海に向けて走り出す

俺は海が見たいんだ、海は初めてでテンションあがってる子供なんだ
青春少年なんだと自分に言い聞かせて限界まで走る

海だーと叫びつつ走り去る、そう俺はうみんちゅだ！

背中から生温かい眼差しを感じたが決して振り返ることはなかった

町に入り、茶屋でトイレを借りた瞬間、今までにない量を吐血して
死にかけた

（後日）

「飛段、お前の飴は処分したからな」

「飴？んなもん渡してたっけ？」

「・・・やっぱり忘れていたか」

「んー？まあいいけどよオ・・・処分って捨てたのか？珍しいな」

「いや、海が大好きな子供にやった」

「・・・？ところでそいつらは？」

「子供が近くにいたから攻撃を仕掛けることのできなかったゴロツキ共の死体だ」

「・・・子供？」

「ああ子供だ」

「そっかー子供かー」

「海が大好きなんだ」

「お前が？」

「違う」

親切にしないで（前書き）

親切にしないで。あなたが会う人はみんな、
厳しい闘いをしている
のだから。

—プラトーン—

親切にしないで

一度茶屋から出て船着き場で乗船チケットを購入しておいた

まだ3時間ほど時間があるので茶屋で食事でもとるかと思い元来た道を歩き出す

歩いているうちに無性に気分が悪くなり、口内に血がたまり始めたいつもの吐血とは違う感覚に焦り、慌ててトイレを借りる

茶屋のトイレを借りて30分はたっただろうか

店員が心配そうに外から声をかけてきている

それを無視して喉を押さえて吐き続けていた

備え付きの小さな鏡が、青白い顔を、この短時間の内にこけた頬を映し出す

喉から手を離し、紙を乱暴に手繰り寄せる

不意に映った喉元に、褐色の絞め跡を幻視した

すこし治まっていた吐き気がぶり返した

心の内に灯るのは恐怖または恨み

ただの弱者でしかない自分に対する恨み

気絶しないよう足をつねって痛みを与える

冷たい壁に身を預け、座りこむ

血の匂いと胃液の酸い臭いが立ち込めている

茶屋の者にいくら包めばいいだろうかと考え息を整える

しばらくして、外から騒がしい音が聞こえてきた

店員が医者でも連れて来たのかと思ったが、突如壁に伝わる衝撃に
飛び上がる

似ているようで、似ていない

どこか懐かしくも、真新しいチャクラ

これを俺は知っている

熱が上がり始めた頭が警鐘を響かせる

思わず腹部を押さえ、壊され動かされた扉を眺めた

金髪の女、長い髪を一つにまとめたくのいちらしき人物

(・・・二位、ユギト・・・)

同じ、人柱力

なるほど、懐かしいと感じたのは尾獣のチャクラのせいだったのか

俺の存在を確認し、吐き続けた血のあとを見るや否や血相を変えた
ユギトはポーチから増血丸を取り出し、そのまま俺の口に含ませた

吐き続けたせいで口内の感覚があやふやになっていたが、なんとか
噛み砕き飲み込んだ

「君、大丈夫かい？常備薬はある？」

優しく、幼子に問いかけるように診てもらっ

震える手で腰につけたポーチをあける

俺が探るより早くユギトが中を確認し、何種類かの薬を取り出す

小ビンに入った錠剤を指し、指で数を示す

途中噎せこんで血を撒き散らしてしまう

店員が水の入ったグラスをユギトに手渡し、彼女は錠剤と水を口に含み、そのまま俺に口移しで流し込んだ

（・・・この体のファースト、キス・・・だな・・・）

薬を飲んだ安心感からか、眠気が襲う

このまま寝てしまっではいけない、気を紛らわすようにユギトの手を握った

「・・・木の葉の、里に・・・港の船・・・」

乗船チケットを取り出しユギトに見せる

言いたいことが伝わったらしく、チケットを確認してくれる

「木の葉に行きたいんだね？大丈夫、船は安心していいよ
医者はもうすぐ来るから、しっかりおし！」

もしかしたら俺以上に青褪めている茶屋の主人が見える

自分の店で死者でも出ちゃ商売にならんわな

迷惑料を取り出そうと胸元から財布を取り出し、何枚かお札を握りしめる

「ぼっや・・・？」

「げぼっ・・・めい、わくりょう・・・ごめ、んなさい・・・」

主人に向ける

ただでさえ青い顔が余計に青ざめていく

いらない心配だったんだろうか

瞼を閉じると限界が来た

遠くから医者が来たことを告げる声がする

ガクツと音を立てて崩れ落ちた

「・・・きて・・・起きて・・・」

誰かが揺さぶっている

頭が重く、起き上がりたくないが、呼ばれてるからには起きねばならない

ゆっくりと目蓋を開く

・・・ああ、二位ユギトか

一瞬誰だか分らなかったが唇を見て思い出した

レモンじゃなくて血の味だったね

「・・・おはよう、ございます、ご迷惑をおかけして誠に申し訳ございません」

秘儀・起きぬけ土下座の術

湯隠れにて強制習得した高等技術だ

これを使えばどれだけ血で汚れていようと大抵のことは許していた
だけのすばらしい術であるマル

「どうやら大丈夫そうだね、それじゃ、私は任務があるから失礼するよ」

苦笑しながらユギトは立ちあがり、傍らの医者らしき人物と茶屋の主人にあいさつする

「お姉さん、増血丸ありがとうございました」

「・・・ああ、気にしないで良いよ

ところで君の船はあと30分経つと出航するから気をつけてね」

瞳があやしく輝いたがそのまま走り去って行った

流石忍者だけある、目にも追えない早さだった

「坊主本当に大丈夫かい？入院したほうが良いと思うんだが・・・」

医者がそう言った

確かにここまで吐き続けたとなると一旦入院しておきたいが、まずは木の葉に行かないとだめだ

茶屋の人々や医者に謝り倒し、迷惑料を支払い団子を買って船着き場へ移動する

途中まで医者がついて来てくれるようだ

「本当、御手数お掛けしまして申し訳ありません」

「いやいや、それだけ元気があればこちらにも有り難いよ
あのまま死んでしまうかと思ったからね・・・」

遠い目で頭を撫でられる

いや、本当に申し訳ないです

「そつえば君は身内に忍者でもいるのかい？」

ん・・・何か探りを入れられて・・・るのか？

一体なんだ？

「祖父代わりの人が忍者やってました」

自称祖父とか言ってたけどな自来也は・・・

俺はあいつを忍者と認めたくない

あいつただの変態か紳士じゃねーか

「なるほどねえ、いやね、増血丸を知ってる子供って中々いないからね」

・・・以前にも増血丸を使ったことが？」

そうか、増血丸って一応忍具だから一般人は知らないはずなのか

ということはユギトの目がおかしかったのもこれのせいか

「何十回と使用してます」

増血丸だけじゃなくて兵糧丸も食べさせられましたね

薬だけじゃ栄養補給できないし血も増えないし・・・知り合いの

医療忍者の方に術をかけてもらったこともありますね」

ひーふーみーと増血丸などを使用した記憶を数えだす

両手で数えきれないぐらいで医者顔色が変わった

「・・・よ、よく生きてこれたね・・・」

純粹に心配されてしまった

拷問の傷も大体癒えてきているため、尾獣効果だと思う

根本的な体質改善には繋がっていない

船着き場が見えた

「・・・それじゃ坊主、気をつけて旅をするんだよ

危ないと思ったらすぐ何処かの病院に駆け込みなさい」

「はい、肝に命じます

あのくのいちさんと出会うことがあればお礼を言っていただけかもしれませんが？」

きちんとお礼を言えなかったのが気になっていてと言葉を濁しながら

らいうと医者は黙って頷いた

船着き場と船を結ぶ木の板を登り船員にチケットを見せる

部屋のかぎを貰い、振り返って医者に手を振った

「・・・どうやら、本当に忍者ではなかったようですね」

医者は出航した船が小さくなるまで見つめていた

ポツリと溢した呟きに反応して女が現れる――二位ユギトだ

「ただでさえ情勢の悪い昨今

雲と揉めた木の葉へ行きたがる子供まで疑わなければならないなんて、な」

「そんな事言いだしたらきりがないでしょうユギト様」

「そうだな・・・入国者の監視なんて嫌な任務ね・・・」

過失の弁解（前書き）

過失の弁解をすると、その過失を目立たせる。
― シェークスピア ―

過失の弁解

晴れることなく暗雲が立ち込める大海原

嵐が絶え間なく続き、船員たちにも支障が来していたがなんとか火の国の港へたどり着いた

正直に言おう

雷の国で入院すべきだった

船医はもうすぐ火の国へ着くと言った記憶はあるが、病室のベッドに身を任せたまま日数など感じられない

吐き気など通り越し、苦い液が口内を蹂躪した

どこからともなく、港についたことを知らせる声が聞こえて来たときには喜ぶ気力もなかった

陸にあがり、新鮮な空気を吸えたおかげか頭がすっきりしていた

先程までは――

「コンよ、よくぞ無事に火の国まで来れたッ
頑張ったぞ！」

俺を抱きしめ号泣するエロジジイのおかげですつきりした頭も頭痛
に悩まされている

・・・木の葉で待つてるんじゃないのか、なんで港にいるんだ
とツツコミたいことは多い

だがそれよりも・・・

「抱きしめるところかサバ折りに進化していくその行動を止める！
！」

くの字に曲がり始めた体が限界を示すようにボキボキと鳴り散らす
道行く人々、特に老人が無事で良かったですのーと声をかけること
がまた気に食わない

「しぬ！比喻表現じゃなくて死ぬ！モツでる、吐血した！！」

叫んだ拍子に溢れ出る血が自来也の髪を染めた

それでも気にせず抱き締め上げられる

ふざけるなジジイ

そのまま数分はサバ折りされたままだった

「死にかけてたお前が無事に自力で歩いていたことが嬉しくてのお・
・・」

拘束から解放され、船着き場から移動し始めた自来也は言い訳がましく呟いた

吐血して失った分を補うように増血丸を貪り食いながら聞き流す

そりゃ、死にかけてたなら心配・・・するのかな・・・イマイチ分からない

「ここから木の葉まではわしが連れていくからの
さぁおぶされ」

町の門につくなり俺の前にしゃがみこみ促される

だから木の葉云々の試験はどうしたってんだよ

渋々背中に体を預け、首元に手をまわして固定する

それを確認して自来也は忍者的スピードで走り始めた

自動車よりもはやーい

周囲の景色が目まぐるしく変化し、認識できるのは色ぐらいだった

まるで溶けて行くような緑色に意識が飛びそうになり気を引き締めた

・・・そういえば、引っかかっていたことがある

「おいジジイ、なんで俺がああ港に来るって分かった？」

手に微かな身震いの振動が伝わる

つばを飲み込んだ感触まで伝わってくる

「・・・んん、雷の国から来る船だったらあの港が一番多いからの、ヤマカンがあたったわい！」

誤魔化すような、そんな声色

ヤマカンのあたりでしゃべるのが早くなる

・・・雷の国から、ねえ？

「・・・・・・・・・・・なんで、俺が雷の国から来るって確定してんの？」

陸路から来る可能性も、あったよな？

耳元でそう呟く

感情の乱れを感じ取った狐火が発現する

「……………いや、その、湯隠れから……………だとそう考えるのが一番で……………」ジジイ」

……………すまん、尾行しとった」

首筋に大粒の冷や汗をかきながら誤魔化そうとしたジジイの耳元に狐火を押し付けた

痛みはさほど感じていないようだが呆気なく答えられた

「デイダラとか角都のときも、見てたのか？」

蝦蟇に試験だと言われたときから見られていたのだらうと予測する

角都のときは助けてもらいたかった

「ん？あの芸術家気取りの小僧と……………お前を投げ飛ばした男か？」

そこまで見てたら助けてくれ

「あいつらS級犯罪者だぞ、助けるよ！あとあいつら月隠れで俺を拷問した奴らだよ！」

怖かったんだからなとジジイの髪を引っ張りながら叫び続け、木の葉に着くころにはお互い気力ゲージがゼロに近かった

人間は自分の知っていることなら半分は信じる（前書き）

人間は自分の知っていることなら半分は信じるが、聞いたことは何も信じてない。

―クレーク夫人―

人間は自分の知っていることなら半分は信じる

木の葉の里、火影邸で三代目の到着を待ちながら茶を啜る
良いお茶だ

何人かの監視の忍者から不躰な視線を感じる

自来也は彼らを見殺しして原稿を書き連ねている

「・・・俺超アウェイ」

視線に耐えきれず自来也に懐に潜り込んで身を隠そうと試みる

無駄に等しい行動だ

時折自来也の原稿の誤字を指摘しつつ湯呑を握りしめた

旅の疲れがでたのか眠りそうになる

「・・・ひーまー・・・」

後日、忍びたちの不躰な視線が、仲の良い爺孫を見る暖かい眼差しだったと説明された

「待たせたのう自来也や・・・それに、コンじゃったか？」

火のマークが入った笠を脱ぎつつ部屋に入ってきた老人、原作より些か若い三代目がこちらを見た

自来也の懷に潜り込んだままの失礼極まりない態勢を正すため出ようとする

すると自来也に制止されそのままの状態で捕獲される

良く分からないがされるがまま三代目に会釈だけ返した

「自来也さま、その子供あまりにも無礼ではありませんか?!」

当然俺の態度が気に食わない側近が怒鳴り散らす

どんな躰をしているのかと小言を食らう

「構わぬよ、わしは猿飛ヒルゼン、この木の葉の火影をしておる者だ自己紹介してもらえるかのう？」

顔を真つ赤にした側近を押さえて三代目が進み出る

いつの間にか原稿を片づけた自来也が俺を強く抱きかかえ、静かに促す

「・・・うらみ コンです

年は・・・見た目より上です

親の顔は知りません、夢は忍者になることです」

当たり障りのない自己紹介

親の顔云々で三代目の表情が曇る

それは同情かそれともスパイかどうかを判断しかねているのかわからない

「俺には不思議な力があります」

そう言いつつ狐火を腕に纏わせる

熱さなど感じない、俺だけを包む炎

ざわめく忍者たちを制する自来也、また僅かに表情が厳しくなる三代目

・・・九尾のチャクラを、残照でも感じ取ったのだろうか

「自来也はこれを狐火と呼びました

木の葉は狐と縁深い地とも聞きました

この狐火はその狐の力の欠片だとも教わりました」

三代目の目を見ないよう、炎だけを見て淡々と話す

嘘はついていないが納得させられるだけの言い分がない

「・・・自来也よ、お前の言っていたことは事実だったのだな・・・

」

ありえないとでも言いたいのだろうか

震える声が俺と言う存在を否定しているように聞こえてくる

「わしが発見したときにはすでに狐火を纏っておった

・・・尾獣の兵器利用の実験体ではないかと思っておる
もしくは九尾の肉でも食らったことがあるのかも知れん」

異世界なんて話しは信じてもらえない

いくら弟子である自来也の言葉と言えど、信じられるものではないだからといってそういう説明をするのはどうかと思う

同情でもひいて解決する問題ではないだろう

「雲の金銀兄弟のように、か・・・」

誰だそれ？原作でそんなんいたっけ？本誌で出たキャラか？

ざわめく周囲から時折、狐やバケモノなどというセリフが聞こえてくる

忍でない俺が聞けるほどの声、聴覚に優れているであろう三代目たちにも聞こえ顔を歪めていた

「コンと言ったの、お前に会わせたい子がおるんじや
ついて来ておくれ」

誰の共もつけず、三代目が退室しようとする

俺がわからないだけで暗部がついているから大丈夫なんだろう

自来也が俺の手を引いて歩き出した

一度取り残される忍びたちを見て、手だけ振った

三代目に連れられてやって来たのはどこかで見た覚えのあるボロア
パート

扉をノックすると少年らしき声が聞こえてきた

「あれ、じいちゃんどうしたんだってば？」

珍しいとも言いたげに扉から顔を出す金髪の少年―ナルト

原作の主人公、ドベと言われながらも後に才能を開花させた、俺と
同じ九尾の人柱力

チャクラが豊富だったと思い出し思わず睨みつける

視線を感じたのかナルトも対抗するかのようにつめつけ……やがて何かを思い出したのか笑いだした

「じいちゃんじいちゃん、もしかしてコイツ、前に言っていた!？」

「うむ……さあコソ、ここが今日からお前の家じゃよ」

……え

「なあお前名前は!？オレはうずまきナルトだってばよ！
仲良くしようってば!」

元気よく手を差し伸べられる

流石にアパートの一室に同居とかないよな？

お隣さんになるだけだよな？こんな騒がしいのと同居とか心安まる暇がないぞ？

黙って自来也を睨みつけ、反応が返ってこないのので渋々差し込まれた手を握った

「ねたみコンだよ
仲良く・・・なれるのかね」

こちらが恥ずかしくなるほど満面の笑みを浮かべられる

握った手はリズムカルに上下左右に振られている

「ナルトよ、コンは病弱での、道中も吐血しておった
なにかあったらすぐに病院に連れて行ってあげるんじゃないぞ」

吐血と聞いて意味がわからなかったらしく、口から血を吐くことだと教えてやれば、血相を変えて三代目に力強く頷いた

「このナルトさまに任せろってばよ！コンも！しんどくなったら俺に言っつてば！」

このテンションが・・・一日中続くのか・・・

なんて罰ゲームだ

思わず溢した言葉に三代目と自来也が笑っていた

24時間営業中（前書き）

家庭——最後の頼みの綱として語れる場所。 24時間営業中。
——ビース——

24時間営業中

ナルトと同居生活を始めて早一ヶ月

いつのまにやら食事担当はオレになり、洗濯（主にオレの血拭きタオル）担当はナルトになった

ナルトは有り得ないぐらい野菜を食べないし、放っておくと三食ラーメンで済まそうとする

好物だから良いかもしれないが・・・飽きないのだろうか

今でも三日に一度はラーメンを出して、野菜炒めをのせたりと工夫している

オレが気を使っているのか、初めての同居人に対して人見知りが発動しているナルトのおかげか同居生活は十分機能していた

そんなオレ達を確認して自来也は取材旅行に行くと木の葉を発った

大蛇丸や暁についての動向を調べに行ったのだと、信じたい、信じたかったのに向かう先は温泉で有名な観光地だった

信じるって、難しいな

「ナルトー、弁当出来たから鞆に入れとけー」

弁当作りを終え、洗いものに取りかかる

朝食を終えたテーブルを拭いていたナルトが弁当を詰め始めた

洗いものを終え、支度を整え、家を出る

今日こそ早退せずにアカデミーを終える、そう心に決めアカデミーに向かった

教室に入るとサスケを中心に女子が騒いでいた

朝っぱらから元気だなお前ら、オレにその元気を分けてくれ頼むから

「コン、顔がこわいってばよ」

「・・・だれかおらにげんきをわけてくれー」

半泣きでナルトに向かい手を伸ばす

切実な願いはあっさりと流された

2人の男女が近づいてくる

「おはらっきー、ナル君コン君」

「・・・さがそうぜ龍玉ーいや狐玉を・・・！」

男子はモノクルをかけ口元をバンダナで隠した含み笑いが特徴の油女シユロ

女子の方は天然パーマを結わえた、雪のように白い肌の志村イカリアカデミーで新しく友となった同士である

イカリ、それだと九つ球を集めることになるのか？

2人ともオレ達を抱きしめてあいさつを交わす

イカリに抱きしめられたオレ達を睨みつける遠くのサスケ・・・

「ああ、青春だな」

イカリはくのいちクラスで五指に入る美人だからな

気持ちはわからんでもない

オレだって中身の性別知らなきゃ惚れてたさ

「気をつける青春師弟に目をつけられるぞ！」

シュロが慌てて止めに入る

コイツは油女一族の異端児と呼ばれるだけあってうるさいな

「コン、今日の放課後、あ、無理だな
お前が入城したら話がある」

ナルトは自分がサスケに睨まれたと勘違いし、喧嘩を売りに行った
お前も元気だなナルト

「オレが保健室へ駆け込むこと前提に言うな、あとオレの城じゃねえ」

保健室通いなのは否定しないが、今日ぐらい放課後まで頑張れるさ

・・・多分

「保健室の主が何を言う」「え、何だ、ねたみの奴もう保健室行くのか!？」・・・あーあ」

イカリの言葉を遮って犬塚の奴が割って入ってくる

編入初日からケンカして犬塚と仲が悪い、が、決してオレのせいではない

体が弱いことを馬鹿にしてくる奴が悪い

無視して席に着く

どうせ放課後になればシュロやイカリが勝手に集まってくるだろう

出席簿を持って入室してきたイル力を見ながらため息をついた

・・・結局、放課後まで体力が持たず、二時限目に保健室送りとなった

「堂々とサボリか貴様ら」

まだ授業中だというのにシュロとイカリまで保健室に居座っている
手桶抱えて血反吐を吐いてるオレを見ながら弁当を取り出しやがった

「それでは第9回転生者会議始めるザマスよ！」

お茶と新しいタオルを配りながらシュロが言う

そう、何を隠そうここにいるオレを含めた三人は、転生者なのである
しかも、オレと同じように一度並行世界に転生してからこちら側に
来ているのだ

こいつら前世の性別と現在の性別が違う

シュロは元々女子高生で、イカリは大学生、男だったらしい

そのせいかイカリは自分の性別について悩み過ぎ、軽い鬱に陥って
いる

「宣誓！今週もワタクシ油女シュロは里の中心たる大広場でイカリ
はオレの嫁と叫ぶことを誓います！」

そういうことからサスケから（恋の）ライバル扱いされるんだ
よお前は

「・・・宣誓、私志村イカリはシュロがコンと結婚することを誓い
ます」

そういうこと言うからオレまでライバル扱いされるんですよイカリ
さんや

「コン君どう思いますかこの清々しいまでの二股宣言！」

二股かけられてるのに嬉しそうだなシュロ

いくら同じ転生者だからって惚れた女の二股発言を喜んではいけない

「オレを巻き込まないで頂きたい

・・・で、前回は自己紹介で終わっちまったけど・・・今回の議題は？」

前回は本当に自己紹介、すなわちオレが人柱力であること、シュロが油女シノと従兄弟であること、イカリがあのだ志村ダンゾウの養女であること

内容が内容だっただけに話が重かった

特にイカリ

「うーん・・・今さら意味がないかもしれないけれど・・・原作介入する？しない？をはっきり決めちゃおうぜ！」

ナルトと同居してる時点で介入してるような気がする

「前にも言ったが自来也に長門情報教えてあるから・・・ああ、試験の話か？」

中忍試験いや木の葉崩しのことを言っているらしい

イカリが弁当の米で蛇を模る

器用だな

「自来也様はねーまあ正直原作でも止めれなかったから、ストーリー通りになると思うよ」

・・・ということは死んでしまっじゃないか

せめて自来也は生存してもらいたいぞ

「卒業試験を半年後に控えた今、現在の成績から考えても私達が班になる可能性は高い

体に問題があるが座学はサクラと同等な後衛コン、

実技はサスケの次でナルト、キバと並ぶ馬鹿トリオな前衛シュロ、孤立しがちなコン、シュロと問題なく合わせられる忍術の評価が高いこの私が中衛

中々バランスの取れた班じゃないか

・・・まあイルカ先生のメモを盗み見たんだけどな」

流石に勉強について負けるわけには行かなかったので本気出した

小学生と同レベルとか嫌だという確固たる意志の元、先週あったテストでまさかのサクラと同点だった

・・・シカマルは、鉛筆ころがしてテスト回答してた

それにしても・・・

「イルカエ・・・」

アカデミー生に盗み見されるってどれだけうつかりしてるんですか
貴方は・・・

「誰が担当上忍になると、オレの体力関係で推薦されないと思うけどな」

推薦されてもサバイバルで落ちるぞ？

「そついやそうだな、議題変えよう、サスケについてだ」

イカリはオレの嫁なんだからフラグは断固阻止するとか意気込んでる

里抜けの話じゃないのか？

「・・・やっぱりどこでフラグを立てたかさっぱりわからん・・・」

頭を抱えだしたイカリ

お前髪の毛長いし綺麗だから好かれたんじゃないか？

「顔立ちはミコトさんに似ているし、お淑やかに見えるし髪の毛ふわわだし・・・」

何より騒がしくない」

「やめて・・・落ち込む・・・」

「シュロ君は彼をボコボコにへこましたいです、てへぺろ」

好きなキャラはサスケだと自己紹介したお前は一体どうしたいんだ
シュロ

24時間営業中（後書き）

ここからオリキャラ祭りがはじまります

大まかな設定

油女シュロ（女↓男）

油女一族分家の子、シノの従兄弟、仲は良い。

好きなキャラはいじめたい派なサド

おしゃべりだが交友関係は狭い

コンには嫉妬より庇護欲が勝っている

原作介入したい派

志村イカリ（男↓女）

志村ダンゾウの養女、見た目は儂げな美人

中身はオタク街道爆走中な兄ちゃん

精神的ホモか肉体的レズかを選べずシュロ以外と結婚する気はない

コンは息子及び弟的立場で構っている

原作介入したくない（原作沿いの方が楽そう）派

棕櫚と錨草（前書き）

棕櫚

「勝利」「不変の友情」

錨草

「あなたを捕らえる」「あなたをつかまえる」「人生の出発」「君を離さない」

棕櫚と錨草

油女シュロの物語―こだわる理由―

ん？なんだオレの話なんか聞いても面白みはないよ？

死因とか調べて転生する条件を究明する・・・ねえ

コンってクソ真面目だね、研究者とか向いてるんじゃないか

まあ、イカリとの出会いを物語ると思えば楽しいか、じゃあ聞いてね？

ただの女子高生だった”私”は些細な争いから死に至り、”オレ”となった

きっかけは浮気、トモダチの彼氏と浮気をしたかしていないかで揉めたんだ

確かに？以前はその彼氏さんのことが好きだったよ

そして私はトモダちに”負け”て身を引かざるを得なかった

だからといってしつこく疑うトモダチとの口論はエスカレートして
いって・・・最終的に私が全て無視して帰った

その翌日、通学路で待ち伏せされ、どこからか持ち出されたレンガ
で頭を殴られて・・・死んじゃった

一度目の死、そして二度目の誕生がはじまった

一回目の油女シュロは成績上位でアカデミーを卒業後、うちはフガ
ク、ミコトと班を組み出世し続けた

あるとき”私”は恋をした

君も知ってる原作キャラクター、ネジの父、日向ヒザシに

だけどこ存知油女シュロは男だ、また”負け”たんだ

いろんな想い、しがらみから逃げるように戦い続け暗部に入り、人
柱力クシナの護衛に選ばれるほどになった

なのにオレは守り切れず、マダラに”負け”たのだ

死なせてはならないと先走った揚句呆気なく死んだ

・ 視界の隅で四代目が時空間忍術を使ったことを確認してそのまま・

こうして一回目のシュロは死に、二回目が始まった、三度目の誕生だ

今のオレのことだね

何かがおかしいと気付いたのはいつだったか

同じ世界に転生し直したなら、暗部入りしたシュロの記録があるはず

油女一族の異端児とも言われたシュロを知っている者は多かったはず、しかしそんな存在はいなかった

世界が違うのだと理解した

それから吹っ切れたようにアカデミー生活を満喫中さ

心のどこかにしこりを残しながら、ね

だけどそのしこりはすぐに解れた、イカリとの出会いによって

ある日編入生が来た、戦災孤児でスパイ容疑などが晴れるまで入学できなかったくのいちが来ると聞いた

今でも憶えている

雪のように白い肌、海のような髪と目、彼女の名は志村　イカリ、
オレの三回目の恋の相手

誰かが言った―サスケがイカリに惚れたらしい―

今度は”負け”ない、そう決めて積極的に話しかけ―彼女が”彼”
であると知った

「サスケと対等な油女一族って原作にいたっけな」

ぼつりとこぼされた言葉に食いついた

仲間だ、味方がいる、もう、オレは1人じゃない

イカリも同じようにオレの存在を受け入れ・・・俺は”勝利”した

オレとイカリで世界が埋まりかけた

だけでもこの世界はオレの世界でもイカリの世界でもない

何かあると世界に疑念を抱いたオレ達の前に、お前が現れた

人柱力だったと聞いて驚いたけれど嬉しかった

何故かって？クシナの時の”負け”をコン守ることで帳消しに出来る

うちはマダラに”勝つ”

コンを守り、イカリを嫁にして幸せに暮らして勝利する

だから絶対にサスケにフラグは立たせない、折る

根元から叩き斬って灰燼に帰すまでスタボロに・・・

あれ？もう良いの？何だよヤンデレ乙って酷いわ乙女になんてこと
いうのよ

志村 イカリの物語―トラウマ―

コン、どうしたんだ疲れた顔して・・・え、リアルヤンデレに遭遇？

お気の毒に・・・おい何だその目は

死因その他諸々を吐け・・・うーん何処から話せばいいのか

とりあえず死因は急性アルコール中毒だな

大学3年目の新入生歓迎コンパで一気飲みしててな、うん、それで死んだ

情けない終わりだったな

気がついたら水の国、霧隠れの里で生まれていた

血霧の里と呼ばれた時代に生まれおちて・・・辛かったな卒業試験・

物心ついたとき、あるはずの物がなくて錯乱してな、近所に住んだ雨由利さんって人が病院まで連れて行ってくれたのを覚えている

・・・連行といっても差し障りはなかったな

女になって本格的に絶望したのは、月の物がきたときだった

かなりきつい体質で下忍だった当時任務中に気絶しちまって・・・
ああ、子供産みたくないなーとか思ってた

微かに残ってる男としての意識が”私”をおかしくして、月経をとめる薬を服用し始めた

誰にも知られないようにこそそそ行動して、中忍になってしばらく
たった任務中

スパイ容疑をかけられて追われる身となった

任務で渡すはずだった巻物をずっと持ったまま実家に助けを乞いに
戻った

・・・干柿 鬼鮫、奴が実家の前に立っていた

今でも憶えている、鮫肌が私に迫る風圧と音、私の死など幾許の興
味もない無慈悲な目、削られていく肉の感覚

握ったままの巻物が手から離れて、気がつくと私は草原に立っていた
何事かと辺りを見回し、異変に気付いた

体が幼少時のものになっている、服装までもがその当時の物だった
呆然と立っていると忍びらしき人々が私や、同じ年代の子供を木の
葉に連れて行った

皆、戦災孤児だった

そのなかにサイとシンがいたみたいなんだが・・・今は関係ないな
何人かの忍びと面会したあと何故かダンゾウに引き取られた

霧隠れの南天 イカリは木の葉の志村 イカリになった

てつきり根の者として育てられるのかと思ったたら普通に養子の手続きがなされた

未だに養父の考えは読めない

それからは、うーん、シュロが大体言ってるしなー

あ、そうだ原作にサクラいじめていたグループいただろう？

あいつらの標的になったわ、何故かサスケファンクラブも一緒にいじめてきた

だからね私はどこでサスケとフラグ立てたかさっぱりわからんのだよ

なんで男なんかにか好かれなきゃならないんだよ！

「女だからだよ」って・・・やめてくれ泣きたい

やめろよーそんな目で見るなよーやだーシュロ助けてー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3070z/>

ひねくれヒーロー

2011年12月31日22時46分発行